

# 江戸漆塗

中島泰英

十一代受け継がれてきた漆塗りの技。長い歴史を背負いながらも、それを重荷とせず、新し物好きの江戸っ子気質で道を切り拓いてきた。



なかじま やすひで ●  
1943年生まれ。漆芸中島 11代目。  
2013年、東京都伝統工芸士に認定。  
東京都中央区佃 1-4-12



お椀、箸、ぐい飲み、櫛など様々なものを手掛ける。百貨店の催事にも積極的に出展し、江戸漆器の普及に努めている

## 漆塗りは子育てのようなもの

上/漆を濾して、チリやホコリなどの不純物を取り除く 下/黒漆を下塗りし、その上に朱漆を塗り重ね、研ぐことで黒の模様を出す「根菜塗」で櫛を塗っていく



### 自ら販路を開拓し 江戸漆器の普及に尽力

大企業の本社ビルが立ち並ぶ日本橋、そして日本屈指の繁華街・銀座を抱える東京都中央区。まさに都心の中の都心といえるこの区の中で、隅田川を渡った先にある佃は趣を異にする。二階建ての家々や商店が軒を連ね、空が広く、掘割も残るその風景は、まるで江戸時代の時間が今も静かに流れているかのようだ。

そんな街の一角に佇む「漆芸中島」も創業は古く、八代将軍・徳川吉宗の頃。当時は現在の日本橋の丸善のあたりに店を構えていた。江戸時代、大名家では女の子が生まれると嫁入り道具として漆の家具や調度品を作らせたことから、漆職



「修業先の親方も、飛び込み営業をした取引先も、お客様も…本当に人に恵まれてきました」

人は高級品を仕上げる高度な技術を有していた。その伝統を現在も受け継いでいるのが東京都の伝統工芸品「江戸漆器」。漆芸中島十一代目の中島泰英さんは東京都伝統工芸士に認定されている。地方の漆器の名産地が「塗りは塗り、磨きは磨き」と分業化されているの 비해、江戸漆器は最初から最後まで一貫して一人の職人が仕上げをしている点が特徴だ。

ながら漆芸を学んだ。「親方には漆の特性から商売のイロハまで、あらゆることを教えてもらいました。大恩人です。その後は自分でかっぱ橋道具街を回り、飛び込み営業で寿司屋のつけ台を漆塗りで作る仕事を数多く手がけました。職人は技術だけを磨けばいいという考えの人もいますが、私は違います。新しい仕事をどんどん開拓し、時代の変化に対応していかないとけない」と中島さんは語る。

父親と二人三脚で仕事をしていた頃は、筆筒や座卓などの大きな家具の仕事が多かったが、やがてお椀、箸、櫛など小物類が中心に。これも時代の変化であろう。道具も工夫する。「この医療用のゴム手袋は便利だよ。薄手だから細かい作業もできるし、手垢が付かないから漆の

乾きも早い。いまだに頑固に手袋せずに真つ黒な手でやっている人もいるけれど、もっと柔軟に考えればいいのに」

作業工程は膨大だ。一回塗ると、乾くまでに数日待たねばならない。注文品の仕上がりには数カ月待つてもらうことも。「漆塗りは子育てと一緒。ちゃんと見てやらないと、きれいに乾いてくれない。こちらが手間をかければかけるほど、良い物になる」と応えてくれる生き物みたい。化学塗料ならすぐ乾くけれど、やっぱり漆の方が面白いね。防腐、防水、防虫や、抗菌作用があるともいわれているし、時を経てツヤを増していく姿も美しい」と中島さん。今日もまた、誰かのもとへ嫁入りする漆芸品を、わが子を育てるかのよう丁寧に仕上げている。